

アブー・バクルがアブド・ブン・アルジュルンディとそのお付きの者達に

ジャフナ家との戦争の準備をさせる (p132)

アブー・バクル、彼を神が嘉せんことを、彼はアブド・ブン・アルジュルンディとアズド族の英雄達からなる彼のお付きの者達との出会いを喜び、彼等に全ての喜びを感じた。つまり前述の彼の演説で彼等を賞賛していた。また正しく理性の民への隠すことのない感謝を彼等にしたのであった。彼等について目にしたこと、耳にしたこと、彼等について理解した事の故に、彼等をシャーム（大シリア地方）にいたアズド族のジャフナ家（**訳者注：ガサーシナ朝を築いた一族**）との戦争を任せたのである。つまり彼が望んでいたのは、あの岩の如き物（ジャフナ家）を叩くことであり、経験から目標を撃つことであった。即ちアブド・ブン・アルジュルンディに望んだのは、シャームの地の凶暴なガサーシナ朝を攻撃することであった。彼等は硬い石であった。アブドとそのお付きの者達はアブー・バクルに遅れを取ることはなかったし、様々な口実を設けて許しを請うこともなかった。それでも我々がオマーンの歴史に関心のある者でなかったら、背教問題がどのようであったかを、誰がどうであったかを述べたであろう。オマーンの外の出来事を我々が述べなかった様に、たとえそれがオマーンの民に起こったことでも、特にオマーンの民以外から起こったものの場合、オマーンの歴史と関係があったとしても、である。何故ならその事は我々と我々の配慮に対して、我々のオマーン史の最重要事項の著述を長引せるものだからである。もし我々がこのガサーシナ朝とオマーンの問題を示すとすれば、その事は、アブド・ブン・アルジュルンディと彼と共にいたオマーンの民の詳細を明確にせざるを得ない。

イマーム（アッサーリミー）、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼が言っている。アブドは、アブー・バクルがジャフナ家との戦いに目覚めさせたのであったが、それに応えた。アブドは先遣隊を付けられ、アブドにそれ（先遣隊）の隊長を命ずると、上述のアブドは兵隊を指揮して出た。それ（兵隊）の中にはムハージル（預言者と共にマディーナ移住した者達、そしてアンサール（彼等を助けた者）の有力者が居たし、またアラブ人の中で彼等と共に周りに居た者達がいた。（イマーム・アッサーリミーが）言った。アブドは先遣隊を率いて出向いた。即ちそれ（先遣隊）の長として。そして行軍を真摯に行い、ついにはシャーム（大シリア地方）で彼等（ガサーシナ朝）の領域に居たジャフナ家のところに着いた。

イマーム（アッサーリミー）、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼が言っている。これには記述が長くなる言い伝えがある。私（イマーム）が言っているのは、(P. 133)我々の国オマーンの情報が無いので、ここでは、記述の列挙について示すことでよしとする。彼（イマーム）が言っている。「アブドの地位は広く知られており、その立ち位置も知られていた」。彼（イマーム）が言っている。「彼の詩人達の一隊の中に、ヒサーン・ブン・サービト・アルアンサーリーが居た。ジャフナ家の館から彼等が来た時、ヒサーンは、ムスリム達の両背中（中央）に居て、アブド・ブン・アルジュルンディに対し、極め付きの賞賛を公言した。彼の言葉全ての中に次の文言がある。「アブドの地位はジャーヒリーヤ（イスラーム以前）もイスラームにおいてもよく知られていた。つまりアブド以上に決断力があり、物の見方、処理能力に優れた男を私は見たことがない。彼は、神に掛けて、一日の朝に彼の心は氣にかけ、朝が暗闇になった時も、一日中、自分自身を神に捧げている者達の一人である」。アブー・バクル、神が彼を嘉し給わんことを、彼の顔は輝き、彼（アブド）により喜ばされた。つまり彼はこう言ったのであった。「我が既に述べた様に、嗚呼アルワリードの父親よ、彼なのである。言葉では彼を描写するには不足であるし、描写では彼の人徳を表現出来ない」。この事がアブドに伝わった時、アブドはハサーン・イブン・サービトに大きな財を送った。彼に手紙で言った。「私のこのお金では、貴方への返礼には足りない。少ない分を許して欲しい。そして出来るだけ

のものを受け取って欲しい」。アブドと彼のオマーン人達の中で同行している者が彼等の祖国へ帰ると決心した時、アブー・バクル、神が彼を嘉し給わんことを、彼はオマーンの民全体へ向けて書を与えた。その中で彼等に、感謝を示し、賞賛している。アブー・バクル、神が彼を嘉し給わんことを、彼はジャイファル（アブドの兄）をカリフ職の一端を担うオマーン総督として、オマーン王に決めていたのである。

イマーム（アッサーリミー）が「名士録」の中で述べている。「オマーンの経て来た諸事の幾つかの中で述べられているのは、アブー・バクルがジャイファルとその弟（アブド）を双方、オマーン王と決め、2人に民から施し（喜捨）を取らせ、それを自分の処へ運ばせた。（この事は）もし神の意志があれば、その箇所での拡張を汝が見ることになるであろう。それが、我々が述べてきた様に、彼をオマーン総督する証拠であった。多分、その後、彼（神）は人々を試すことを望まれるのか、又は政策が或る事柄を必要としていたか、各時代に施策があり、各々の時には業績があり、各首長には（政治的）方向性がある。アブー・バクルは、神の預言者亡き後、物事について合意したと見做す者と合意を図ることにに関して、ウンマ（イスラーム共同体）の中で一番優れた者であった。

オマーンとアブー・バクルその生涯を通して (p134)

アブー・バクル、神が彼を嘉し給わんことを、彼がムスリム達の諸事を既に支配するようになっていたが、オマーンは、その総督のアマル・ブン・アルーアースの手にあり、彼はそれ（オマーン）の2人の王ジャイファルとアブドにより強化されながら、諸事を管理していた。神の使徒の死の知らせがアマル・ブン・アルーアースに届いた時、後任を託されたカリフに対して、彼の統括地の諸事を携え、ムスリムの揺籃地（マディーナ）に帰ろうと思った。マディーナに着くまでオマーン民の優れ者達の中から彼の旗下にある70騎の騎士を伴っていた。彼等の先陣を切ったのは、オマーン王である高名なアブド・ブン・アルージュルンディであった。つまり（後任を託されたカリフとは）ムスリムに対する預言者の後継者であるアブー・バクル、彼はイマームの地位の最初の正当なイマームであり、ムスリム達を驚かせ、それにより信仰者達の精神を絶えさせ、イスラームが彼等の心に勝る事が出来ず、信仰が彼等の脳裡に根付かなかった無知の人々の心が、それにより逸脱してしまった空隙を神がその者により埋めた最初の人であった。

つまりアブー・バクルは、迷える人々が彼の場所から動かすことの出来ない重石であった。つまりアマル・ブン・アルーアースは自分が持ってきた使命を彼に投げかけた。するとアブー・バクルがそれを広い胸、開いた心そして（周辺の）騒乱も影響しない確たる決断で受け入れたのだった。つまりアブー・バクルはオマーン民を高い賞賛を以て褒め賛え、十分な謝意で感謝した。何故ならオマーンの人々は、従順に信仰し、服従し従う者として彼の元にやって来たからであった。他方で、殆どのアラブ人達が動揺していて、中には背教した者、背教しようとしている者がいたにもかかわらず。アブー・バクルは、オマーン人達をシャーム方面に居るジャフナ家に対して準備させている。彼等は使命を最善に完遂し、神の支援による勝利と征服を伴い、後継者（カリフ）でありイマームの処へ戻ったのである。そして彼は彼等にオマーン王権を託し、彼等を支え、彼等の支援を強め、彼等の利益の道筋について宣言したのであった。これにより彼等はその名声に名声を重ね、その力強さを支える力を増し、尊敬される者、名誉ある者としてオマーンに戻ったのであった。

種々の歴史には、アブー・バクル、神が彼を嘉し給わんことを、彼がオマーン王にアクラマ・ブン・アビー・ジャハルを採用し、その後彼を廃し、イエメンに行かせた。そしてフザイファ・アルカルアーニーをオマーン王にした、とある。歴史書は述べている。「アブー・バクルが亡くなるまで、彼はオマーン王であり続けた」。私は

言った。「この（後者の）任命とアクラマの任命は、両方ともアブー・バクルの施策であった。それは明白な事であった。それ（施策）の期間は長くなかった」。と言うのは、アブー・バクル、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼のカリフの地位の期間が長くなかったからである。アブド・ブン・アルジュルンディーは、（その時）既に彼の元を離れて（マディーナを）出ているが、彼（アブー・バクル）はオマーンを彼と兄のジャイファルに任せた。恐らく余り長くない期間後で、アブドが任命された事に注目する必要がある。そのすぐ後でフザイファの任命があった。任期は長くなかった。（この事は）「森のライオン（書名の正式名称：教友の知における森のライオン）」の中に実証なしで述べられている。またその書物が述べるには、アルカルアーニーは、アブー・オマルの写本では、表記が、カーフ、ラーム、点のないアイン（つまりガインではない）となっている。

イマーム（アッサーリミー）が言っている。イブン・アルアシール（藪のライオンの著者；555-630H）曰く、「私はその件について疑いを持っている。アッタバリーが、彼の発音表記をして、言っている。フザイファ・ブン・アルフサインであり、アルーガルファーニーで点付きガイン、ラーム及びファーである」。私（イマーム・アッサーリミー）は言った。「多分彼はアルカルハーニーで、それは遠からず、である」。この単語が（単語の）形からして近い。彼（イブン・アルアシール）が言った。「彼にはペルシャの戦いでは、多くの足跡がある」。彼（イブン・アルアシール）が言った。「オマルが彼をヤマーマ（地方）の長に任じた」。彼の記述は、イマームであるオマル・ブン・アルハッターブ、神が彼に慈悲を与え、嘉し給わんことを、彼のカリフ職のところ（の項目）に来ることになる。

アブー・バクルの時代にオマーンのダバーの事件が起こったが、それはアブー・バクルの生前の最後（の時期）であった。その事に関しては、アブー・バクルがフザイファ・ブン・ムフシヌ・アルガルファーニー、彼はその発音スペルの違いを前に述べたが、彼を差し向けたのだった。彼は（アラビア半島西側のアシール地方の）バーリク出身の人で、（アブー・バクルが）彼をオマーンへ派遣した。彼はアンサール（メディーナでムハンマドを支援した人々）の同盟者であった。彼には先見の明があった。彼（イブン・アルアシール）が言った。「彼はフザイファ・ブン・アルーヤマーニーの事ではないか。と言うのはアブー・バクルが（彼を）オマーン的首長にし、オマーンの民からサダカ（施し）を徴収したのだった」。私（イマーム・アッサーリミー）が言ったのは、「彼は恐らくサダカを徴収するためだけの首長だったということである」。前に述べたアブド・ブン・アルージュルンディに関する情報の中では、(P. 136)アブー・バクル、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼がサダカを徴収するよう命じたとある。つまりアブドの首長が廃止されたかの様であった。

彼（イブン・アルアシール）が言った。「彼がアルハリス・イブン・マーリク・ブン・ファヒムの子孫のところに来て、彼等からサダカ（喜捨）を徴収することになった時のことであるが、彼のお付きの或る者が、（サダカを）免除された女を捕らえ、彼女からサダカを取ろうとした。彼女は年老いた牝羊を差し出さねばならぬことになった。ところが、彼女は、子山羊もしくは牝子山羊を牝羊の代わり、つまり代替えとして差し出した。ところが彼等は、望んだものとしてこれらを受け取ることを拒んだ。それでこの女は、嗚呼マーリク家の人達よ、と叫んだ。するとサダカ徴収の長フザイファが言った。「その（女の）言い方は、ジャーヒリーヤ（イスラーム以前）の呼び掛けである」。即ちこの様な言葉のやり取りはジャーヒリーヤ（イスラーム以前）にあったものだった。当時は背教の火山がその勢いを得ていた時代だった。それ故にフザイファがジャーヒリーヤ（イスラーム以前）の呼び掛けで言ったのだった。彼は部族が既に背教していることを恐れたのであった。恐らく悪魔が、部族は背教者になっていると囁いたのであろう。それ故、ジャーヒリーヤ（イスラーム以前）の呼び掛け合いが聞こえることになった。私は神に誓って、この事は示されてしまった（当時の）傾向以外の何ものでもないものであり、そこには理解の相違があった。恐らくその様なことが、無知の人々から、そして背教の気もない一般のムスリム達から起こったのであろう。彼（イ

ブン・アルアシル) が言った。「フザイファが彼等を襲い、彼等の中の人々を捕らえ、数は少なかったが、多分彼等が無勢故であろう、強引に彼等を縛った。そして彼等を連れてマディーナへ行った。(その事は) 彼等の互いの呼び掛けから、彼(フザイファ) が理解した背教であるとの主張であった。

イマーム(アッサーリミー) が言っている。「彼等の指導者達の一人である、サイラムの出身のスバイア・ブン・イラク、そして彼等の同伴者達の中にアルマアーリ・イブン・サアド・アルハマーミーとアルハーリス・ブン・カルスーム・アルホダイディは怒り狂っていた。そして彼等はアブー・バクル、神が彼を嘉されんことを、彼の処へ行った。彼等は言った。「嗚呼、神の使徒の後継者よ、我々はイスラーム(への改宗を宣言しており)、それから移行したことは無かったし、ザカートを禁じなかったし、手を敬虔な行為から離すことはなかったし、また宗教から(離れて、イスラーム以前に) 戻ることもなかった。貴方の総督は急いでいたが、我々が貴方の処へ到達するまで我々の手を止めていた(手出しはしていない)」。するとアブー・バクル、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼が言った。「私は、貴方達の為に、アラブ人達にした事をする。もし貴方達が望むなら、財産を取ることをやめて、捕虜を取ることにする」。彼等は捕虜解放の身代金を支払った。すると彼等が言ったのは、「捕虜一人あたり 450 デイルハム」。イマーム(アッサーリミー) が言うところでは、「アルアウトビイが「系譜」の中で、その様に述べている。彼は言った。「スバイア・ブン・イラクは、フザイファ・アルガルファーニーが取ったダバーの捕虜の件で、アブー・バクル・アッシッディーク、神が彼を嘉されんことを、彼の処に出向いたと言われている」。(P. 137) 上述のスバイアがその部族の指導者であった。またアルマアラー・ブン・サアド・アルハマーミーもいた。そしてアルマアラーの名前は、元は牝狐(サアラバ) で、牝狐といえば狐につける名前で、狐はずる賢さと騙しで有名であることに由来し(好ましくない)、信者の長オマル・ブン・アルハッターブ、神が彼を嘉されんことを、彼は彼にアルマアラーと名付けたのだ。彼とスバイア・イブン・イラクが部族の指導者の2人であって、解くも結ぶも(全権が) 全てこの2人に拠っていた。つまり彼等はマディーナにやって来たが、その時既にアブーバクル、崇高なる神が彼に慈悲を垂れんことを、彼は亡くなっていて、人々の事はオマル・ブン・アルハッターブ、神が彼を嘉されんことを、彼が司っていた。2人は彼にダバーの民の捕虜について話した。アルマアラー・ブン・サアド・アルハマーミーが言った。「嗚呼信者の長よ、フザイファ・ブン・ムフシヌ・アルガルファーニーは限度を超えている。人々の中では彼の誤った行為が重大なことになっている。もし信者達の長の監視がなかったら、彼の猿轡は確たるものになるだろう。(そして) この事は彼以外の人への見返りとなるであろう。つまり彼以外の人に警告となる。しかし、彼は我々を、彼の足枷の恐れへともたらし、(それによる) 躓きと背中合わせになっている。自由人は沈黙して(つまり我々は内面で彼と対峙することなく)、我々は殆んど(自由人では) ない。私(イマーム・アッサーリミー) は言った。「これは、見た目には、意味のない混乱した言葉だった」。そしてオマルが言った。「嗚呼マアラーよ、真理(神の教え) には広さがあり、汝の気質の激しさを止める事は汝にとってより相応しいことである。イスラームは人々の間で同じもので、低い位置にある人を上げ、もし真理(神の教え) に反すれば、高い位置にいる人を下げるのであり、個々の人に善と悪からの公平を与えるのである。それからオマルは捕虜の返還を命じたのだ。それ故に、イマーム・アッサーリミーが言ったのだ。

捕虜を捕らえた者が皆にダバーの日のことを説明した。

あの真偽の分かる人(オマル・ブン・アルハッターブ) がそれを否定した。

ここから分かることは、イスラームのイバード(派の人々) は、人々を不信心、即ち人々の多神教化に関して、(自己) 解釈する事により裁定するものでない事、つまり(自己) 解釈による不信心裁定は、原理以外のものに則

る事なのであった。しかしワッハーブ（派の人々）はそれ（自己解釈）により判断するものであり、つまり多神教の大罪を犯した者は、（自己）解釈により多神教の烙印を押されるのである。彼等が、彼に言った。「貴方は、多神教徒だから、貴方の血は許されたもの（殺してもよいもの）で、貴方の財産は戦利品だ」。つまり宗教が満足しないもの（自己解釈）により裁定し、我々の知っている神の使徒の教友の誰一人も裁定しなかったことにより人々を彼等は晒し者にしたのであった。

（P. 138）イマーム（アッサーリミー）が言っている。「長老ハルフ・ブン・ズヤード・アルバハラーニーの伝記の中で、彼が言った。「我々の元に（以下の）知らせが届いた。アブー・バクル、神が彼を嘉されんことを、彼がオマーンの民へ、彼等の財産の中からサダカ（喜捨）を取る者を派遣した。彼等はイスラームの裁定全てを是認した者達であった。と言う訳で彼等はサダカ（喜捨）全てを彼に与え、彼等の誰一人もそれを妨げなかった。但し、ダバーの人々の中の1人の女が、サダカ（喜捨）を取る者達の或る者と争い、彼がその（サダカを取る）権利を全て履行した（徹底的に奪い取った）と彼女は主張し、彼の方は、彼の（サダカを取る）権利を彼女に残してあると主張した。2人がこの事で敵対し合い、彼が彼女を一叩きし、彼女が彼女の一族の幾人かに助けを求めると、男が彼女を助けに来た。その男と彼と一緒に居た者達が、彼女を叩いた男と彼と一緒に居たサダカ（喜捨）取りの者達の中で彼と一緒に居た者達の処に近づいて行くと、戦い合いになり、「嗚呼何某の一族の家の者よ」と、声をかけ合っていた。この時、彼等は戦闘が彼等の間で勃発したと見做した。

イマーム（サーリミー）が言っている。「それはイスラーム以前の呼び掛けであった。それ（この呼び掛け）を口にし、即ちそれで呼び掛けた者に（それを）言われた者は、彼の血（殺害）が許されているのであり、（その事は）それで呼びかけているか、又は神が許している時の事である。それから彼等は、神が望まれる儘に戦い、（派遣された）サダカを徴収する者達が彼等（ダバーの人々）に対して勝利した。それからフザイファ・アルガルガーニーがやって来た。この件の責任者としてであった。つまりダバーの人々を捕虜とした。その中には、女達や幼児達等の彼等と戦わなかった者の家族が居た。また不在であったり、既にムスリムとして、死亡したりした者の家族が居た。その妻達は、真理（神の教え）の中で彼等の眼前にあるものにより、神の啓示の何事をも否定せず、彼等（徴税人達）を拒否もしなかった。

イマーム（サーリミー）が言っている。「ダバーの人々の中で運命を背負わされた者は誰一人として、捕虜になるしかなかった。オマル・ブン・アルハッターブ、神の慈悲が彼の上に有らんことを、彼の職位がこれと同時期であった。彼等の派遣の最初のもは、アブー・バクル、神の慈悲が彼の上に有らんことを、彼の存命中だった。信者の長オマル・ブン・アルハッターブがこの事件を調べて確認した時、彼は我々が彼に関して知った中では、（今までに）無い様な怒り方で怒って、次の様な言い方さえした。「神に掛けて、もし汝（ホザイファ）が、宗教（の名の下）に私を抜きに（相談しないで）、彼等を捕らえ、私に彼等について（汝の独自の裁定で）断罪した、と言う事を私に知らせていない、と言うことを私が知ったならば、私は汝をバラバラにして、それから汝に対して言い分がある個々の者達に対して、バラバラにした（汝の）断片を送る事にする」。言わんとするところは、もし私が、汝がその事を宗教（の名の下）に成した、と知ったら、即ち貴方が宗教においてそれが解決であると思ひ、言い換えるとその解決を汝が宗教的に（自己）裁定したと言う事であるが、汝の懲罰は、汝以外には戒めとなるような懲罰となるだろう。意図するのは、（自己）解釈を宗教だとする人に対する抑制と強制力のある誓いにすることだ。神がオマルに慈悲を垂れんことを、彼が、若し今日宗教を（自己）解釈出来る人を見たら、（P. 139）そしてムスリム達の財産が戦利品として分配され、血が宗教の（名の下）に注がれ、神に対してイスラームに信仰告白しており、強く威厳の有る神の宗教の命令が正当なものと考えている親族が捕虜にされているのを目にした時、それに対して何をやるのだろうか。

長老ハルフ・ブン・ズヤード・アルバハラーニー、神が彼に慈悲を垂れんことを、彼が言った。「それから取り消された。即ちオマルがダバーの人々に命じたのであった。即ちサダカ（施し）徴収人が彼等に対して判断した裁定を取り消し無効にしたのである。それは彼が、かの大脅迫をもって彼等（徴収人達）を恐れさせた後のことだった。そして彼は人民、即ちダバーの捕虜達は、彼等の中で何らかの裏切りに値する者を除いて、即ち神が課した事に関する裏切りが現れた人を除いて、彼等の家へと戻した。

彼（長老ハルフ・ブン・ズヤード・アルバハラーニー）が言った。「ムスリム達に対して、災いをもたらされた物に（応じて）報いた。そして彼等について試練の中で 300（の試練があれば）300 が（相応することになったので）あった。即ち、その災難で災いを蒙った者の中で各人当てのものとなったのである。彼は、宝庫の中から彼等へと（それを）出させたのである。恐らく彼が宝庫に対する（徴税の）解釈の間違いと見做したのであろう。それはムスリム達の足跡の一面であった。

イマームであるアッサーリミー、神が彼に慈悲を垂れんことを、彼が言っている。「これが、オマーンの諸書籍にある様に、ムスリム達の元におけるダバー事件の要点である。オマーンの人々は、自分達の状況を最もよく知っている者であり、自分達民族に最も精通する者である。

彼（イマーム・アッサーリミー）が言っている。「イブン・アルアシールがその著カーミルで述べていることは正しくない」。というのは、そこでは「そしてオマーンと言え、そこでは、王冠の所有者ラキート・ブン・マーリク・アルアズディが登場した」。と言っているからである。私（イマーム・アッサーリミー）が言った。「彼はこのマーリクをもって、マーリク・ブン・ファフムを指したのだらうが、ラキート出自のマーリク・ブン・ファフムは何処にいるのか。つまり 2 人の間には何世紀もの隔りがある。つまりマーリク・ブン・ファフムは、神の預言者ムーサー（モーゼ）・ブン・ウムラーンの時代の人だ。ムーサー・ブン・ウムラーンとムハンマドの間の隔りは何世紀あると思うのだ。何よりも先ず、この観点から、イブン・アルアシールが述べていることに根拠はない。

彼（イブン・アルアシール）は言った。（注：1）「彼（ラキート・ブン・マーリク・アルアズディ）はジャーヒリーヤ（イスラーム以前）には、アルジュルンディーと呼ばれていた。又彼（イマーム・アッサーリミー）は言った。「彼は預言をする者であると詐称するかの様に詐称をした。そしてオマーンを背教者として征服していた」。

（注：1）私（イマーム・アッサーリミー）は言った。「この事は歴史に関する無知であり、混同である。そして外国人達は調査をする事無く諸情報を採用する。特に彼等に反する様な人物に関しては、そして分別のある人とはそれ（情報）を調査して採用する人の事である」。

彼（イマーム・アッサーリミー）は言った。「（このラキートのオマーン征服の為に）ジャイファルとアブドは、山地へ避難した。（P. 140）ジャイファルはその情報を持ってアブー・バクルの処へ行って、それを彼に提供した。彼（イマーム・アッサーリミー）は言った。「するとアブー・バクルがヒムヤル出自のフザイファ・ブン・アルガルガーニーとアルファジャ・ブン・ハジーマ・アルバーリキー・アルアズディを派遣した。フザイファをオマーンへ、アルファジャをマフラへ（派遣し）た。2 人のそれぞれが、その方面においては相手の上司であった。2 人がオマーンに近付いた時、2 人はジャイファルに連絡を取り、オマーンに行った。アブー・バクルはアクラマ・ブン・アビー・ジャフルに使者を送った。彼はかつて彼をヤマーマに派遣してあった。つまり彼に手紙を書いて、言った。「フザイファとアルファジャに供の者を連れて追い付き、オマーンとマフラの人々の為に 2 人を支援するように」。つまり彼等の任務が終わった時に、イエメンに行くと言う事であった。アクラマは 2 人がオマーンに着く前に彼らに追い付いた。そしてオマーンに近いラジャーマに着いた時、これは町のことを彼（イマーム・アッサーリミー）は言いたい様だが、我々はこの名称でそこを（最早）知らない。彼等がジャイファルとアブドに連絡を取り、また

ラキートは彼の部下達を合流しダバーで軍営した。ジャイファルとアブドは（避難地）から出てきて、ソハールで軍営した。2人はフザイファとアクラマとアルファジャの処へ使者を出した。すると彼等が2人の方へ来て、ラキートの元に居た人々の長達に「彼を拒否せよ。」との書簡を送った。それからダバーで（両軍は）会い、激しい戦いを戦った。ラキートはムスリム達を抑えた。即ち彼等に勝った。つまり彼が勝利を眼にし、ムスリム達は、損害を見ることになり、彼等がこんな状態である時に、ムスリム達の処へナージア族から最重要物資がもたらされた。アルハリート・ブン・ラーシドが彼等の長であった。そしてシーハーン・ブン・サウハーンが長であったアブドルカイス族や彼等以外からの者達であった。神がムスリム達を力付けると、多神教徒達は背を向けて逃げた。

彼（イブン・アルアシール）は言った。「その中のある者は、戦場で殺された。4000（の兵）を送り、彼等を追い廻し、そしてとうとう打ちのめし、家族を捕虜にした。財産を分配しその5分の1は、アルファジャに持たせてアブー・バクルに送った。フザイファはオマーンに留まり人々を宥めていた」。彼（イブン・アルアシール）は言った。「マフラと言え、アクラマ・ブン・アビー・ジャハルがオマーンを出た時に、彼等（マフラの人々）の元に向かっていた。彼と一緒に居たのは、ナージアとアブドルカイスとラーシブとサアドの諸族に援助を求めた者であった。彼（アクラマ）が彼等の国々に居た彼等の元に進行していった。そして彼はそこ（の国々で）マハルの24つのグループに出会った。1つは、サフリート族と共に居る一群で、もう1つはムハーリブ族の1人ムスビフと共に居る者達であり、殆どの人々は彼と一緒にであった。（P. 141）2つのグループは違いのある二組であったので、アクラマはサフリートに連絡すると、返事があってイスラームに改宗した。ムスビフに呼び掛けの連絡をしたが応答がなかったので、彼と激しい戦いをした。背教者達が負け、彼等の首領は殺され、ムスリム達が彼等を追いつめて、望み放題殺し、戦利品の中で望み放題の物を得て、その5分の1をサフリートに持たせて、アブー・バクルに送った。アクラマと彼の兵士達は、背中（を押し軍事）力と物資を望んだ。アクラマは人々（兵士）が集まるまで、必要とする事を実行し、人々は、イスラームに忠誠の誓いをした」。イブン・アルアシールの言葉は（ここで）終わっている。イマーム（アッサーリミー）が言っている。「そしてその全てが、偽りである」。私は言った。「これらの歴史家達は、情報は根拠のあるものもないものも受け入れている。しかし、歴史家に報告されたもの以外のものや、時には、民衆を通じての情報もある。それ（情報）の持ち主以外の他者に対してそれを注釈しているのである。「情報の語り手以外に情報に害がない」。